

“笑顔”つなぐ
はままつの
ユニバーサル農業
－農業と福祉のいい関係－



ユニバーサル農業

ユニバーサル農業とは、一般的には、「園芸福祉」や「園芸療法」として知られている、園芸作業を行うことによる生きがいづくりや高齢者・障がい者の社会参加などの効用を、農作業の改善や農業の多様な担い手の育成などに活かしていこうという取り組みです。

近年、農業分野における担い手不足と、福祉分野における障がい者の職域開拓・雇用促進をマッチングする『農福連携』の取り組みが全国的に広がっています。浜松市では、平成 17 年度より浜松市ユニバーサル農業研究会を発足し、様々な連携のモデルが生まれてきました。

「"笑顔つなぐ" はままつのユニバーサル農業」は、福祉、企業、医療など、様々な立場での農福連携に関わる研究会メンバーの活動をインタビュー形式で紹介しています。

京丸園株式会社 鈴木厚志	1
障害福祉サービス所・だんだん 金田祥史・和田里美	5
株式会社ひなり(特例子会社) 中島昌博	9
スズキ果物農園 鈴木隆広	13
聖隷クリストファー大学 建木健	17
まるたか農園 鈴木崇司	21
鈴木泰子社会保険労務士事務所 鈴木泰子	25
takayamarose 高山隆	29
一般社団法人ノーマポート 高草志郎	33

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

京丸園株式会社

鈴木厚志



上：中にブラシを備えトレーを入れることで洗淨できるよう製作した機械
下：現在はさらに改良を加えたより効率的な洗淨機械も稼働している

profile

京丸園株式会社代表取締役、NPO しずおかユニバーサル園芸ネットワーク事務局長。平成9年から障がい者雇用をはじめ、現在ユニバーサル農園として障がい者24名を雇用する。芽ねぎ、姫みつば、姫ちんげん等オリジナル商品をJAとびあ浜松、静岡経済連を通して全国40市場に周年出荷している。

■ユニバーサル農園・京丸園のはじまり

京丸園は芽ねぎやチンゲンサイ、ミツバなどを栽培している農業生産法人で、現在74人の従業員のうち、24人が障がい者のスタッフです。経営理念は「笑顔創造」。農業を通じて笑顔を創造し、従業員さん、お客様の心と体の健康を応援する農園を目指しています。

私たちが、精神や身体などに障がいを持った方を雇うきっかけになったのは、規模拡大のために求人を出した時のことでした。ある日、障がいを持った子とそのお母さんが来られて、農園で働かせてほしいとおっしゃいました。その時の私は、障がいのある方に農業は無理だろうと思ってお断りしたのですが、「給料はいらないから働かせてほしい」と必死にお話しされるお母さんにおされ、1週間だけ

農作業体験として受け入れることにしました。

その時の「給料はいらないから働かせてほしい」という言葉は、しばらく私の頭から離れませんでした。当時の私は、仕事はお金を稼ぐためにするものだと思い込んでいたので、その真意が理解できなかったのです。その後、福祉施設に勤める知人にその話をすると、「障がい者を雇い入れる企業はまだまだ少なく、就職ができなかった方は福祉施設に行くことになる。福祉施設に行くことは面倒を見てもらう立場になり、働きの場に身を置くこととは違うのです。」と、障がい者の実情を教えてくださいました。働くのはお金を稼ぐためだとは思っていなかった自分が恥ずかしくなると同時に、私たちの農業が福祉の役に立つのではないかと思いはじめたきっかけとなりました。

農作業体験として受け入れ後、しばらくすると農園に変化が生まれました。健常者の従業員がその子を助けるようになり、コミュニケーションが生まれ、職場の雰囲気明るくなりました。そして、障がい者のできる作業を受け入れ側が考えていくことで、農業経営に大きな変化が生まれてきたのです。

■障がい者を受け入れて、はじめて認識できた農業の弱点

障がいのある方を受け入れたことが、大きな気づきにつながった出来事がありました。

あるとき、特別支援学校の生徒さんの実習を受け入れることになったのですが、いきなり野菜の生産に携わるのは難しいと思い、トレー洗いの仕事をお願いすることにしました。私は、「このトレーをきれいに洗ってください」と作業を頼み、1時間後に戻ってみると、その生徒さんは最初に手にしたトレーをずっと洗い続けていました。洗ってもらいたいトレーはまだ数百枚もあるのに…、そう思

い私はすぐに先生に連絡し「この子に作業はできませんよ」と苦情を伝えました。すると、先生から「あなたはどんな作業指示をしましたか？」と聞かれたのです。私は、「トレーをきれいに洗ってください」としつかり指示しましたよ」と伝えると、「そんな指示の出し方をするから生徒が迷うのです。そんな抽象的な作業指示を出しているから農業が衰退するのです。」と反対にお叱りを受けたのです。

私は、その時はっと気が付きませんでした。たしかに、農家の人たちは、水かけ作業の指示も「苗にちよっと水かけといて」とよく言います。作業指示は具体的でなければ、誰も作業を手伝ってられません。私たちの農業現場には抽象的な言葉が飛び交っている、後継者が育ちにくい状況にあるのだと認識した出来事でした。障がい者に農業現場に来ていただいてはじめて、農業という産業の特殊さが自分の中で明らかになったのです。

この先生の一言から、ブラシを回転させ、そこにトレーを入れ、上下に2回と指示できる機械を製作しました。その結果、作業精度が均一で、作業スピードは手洗いの2倍となりました。



左：手際よく出荷調整作業を行うスタッフ。
右：プレート一枚を使うことで誰でも均一な作業が可能となった。



ハウス内の虫を吸いとる虫取り機。ゆっくりと障がいのある方のペースで動かすことで、効果を発揮する。



総務部長を務める妻・緑さんとともに、ユニバーサル農園の経営を行う

■福祉分野から学んだ「作業分解」の視点

農園で起こった出来事をもう一つご紹介いたします。

ある日、特別支援学校の先生が農園の視察に来て、そこで行っていた芽ねぎの定植作業を障がいの生徒にやらせてほしいと言われました。芽ねぎの定植作業というのは、パネルに対して水平に、そして素早く作業しなくてはならないもので、健常者の中でも特に器用な人が行う、いわば「職人の仕事」でした。この仕事は障がいの者では無理だろうと私は判断し、そうお伝えしました。ところが、特別支援学校の先生は学校にあった下敷きを持ってきて「こうすればうちの生徒でもできます」と、これを使い職人たちよりもきれいにはやく定植してみせたのです。

農業では、種まきから収穫まで、すべて一人でできて一人前。職人にならなければいけないと私たちは教わってきました。しかし、福祉の方々は最初から一人でやろうとは考えません。作業を切り分けてみんなで誰もができるようにする「作業分解」の視点で仕事を考えます。また、仕事に人を当ては

めるのではなく、目の前にいる人がどうやったらできるようなになるか作業のやり方を工夫したり、治具や機械化を考えます。仕事に人を当てはめる考え方で、仕事や作業のやり方に変化は起きない。障がいの者が働けるように、仕事や作業を根本から考え直すことが、農業に変化をもたらすのだ。そう気づかされた出来事でした。

■「心耕部」で、農業をユニバーサルデザイン

当園が障がいのある方をはじめめて雇ったのが約二十年前。その後、毎年1名ずつの障がいの者を雇ってきました。現在、社内には土耕部と水耕部、それから「心耕部」という部署を設けています。この心耕部に障がいの者は所属し、生産部署で仕事をしています。

健常者の従業員には、採用が決まると、会社は「この仕事をお願いします」と依頼します。しかし、心耕部に所属すると、「あなたはどんな働き方をしたいですか」と会社が本人の要望を聞くという体制をとっています。障がいの者が農園で働くことができるように会社が

農作業形態、仕組みを変えているのです。なぜそんな面倒なことをするのかと、疑問に思う方もいるかもしれませんが、ユニバーサルデザインの考えの基本は、「人」です。作業する人を中心にデザインしていくことで、私たちは新たな作業方法やビジネスの誕生を狙っているのです。障がいの者が一人、農園にやってくると、農園の中に変化が起こり、新たなものが一つ誕生する。この構造は、既存の農業を業を変革していくキーワードとなります。

また、あくまで農業という産業

（ビジネス）が核であることを忘れてはいけません。障がいの者が福祉が、産業の中で負担となるのではなく、プラスとなるデザイン。それをみんなで作り上げていくことが、これからの社会でとても重要になっていくと思っています。

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

障害福祉サービス所・だんだん

金田祥史
和田里美



上：施設内の訓練のひとつとして、縫製作業などを行っている。
下：スタッフが一緒に農場を訪れ、指示しながら農作業を行う。

profile

だんだん 医療法人社団至空会が運営する障害福祉サービス事業所。多機能型事業所として就労移行支援、就労継続支援B型、生活介護、生活訓練などその他の様々な福祉サービスを行う。

金田祥史（写真左）
精神保健福祉士・社会福祉士・介護支援専門員。だんだんの管理者として施設長を務める。

和田里美（写真右）
精神保健福祉士。だんだんの就労支援員として様々な事業に携わる。

■だんだんでの農作業のはじまり

金田：障害福祉サービス事業所「だんだん」は、障がいを持った方の生活や就労の支援を行う福祉施設です。精神科クリニックなどを運営する医療法人社団・至空会が母体であり、就労移行支援や生活訓練など障がい者支援に関する様々な事業を行っています。ここ数年で法律も大きく変わり、障がいのある方がどんどん自立して社会に出ていこうという機運も高まって事業も多様となってきました。

和田：だんだんには、毎日35名ほどの施設利用者さんが通所されていて、現在製菓や縫製などいろいろな作業を行っています。そのうちのひとつに農作業があります。農作業をやらせてもらうようになったのは15年程前になるかと

さんを車に乗せて小グループで現場に行き、依頼された作業をスタッフが指示しながらみんなで一緒に行うという形で取り組んでいきます。農家さんから「助かるよ」という嬉しい声もいただけるのですが、私たちにとても農業に関わらせていただくことで得られる皆さんの良い面がありました。

■農業に携わって知ったたくさんのメリット

和田：屋外での作業というのはあまりなかったこともあって、始めたころから農作業は利用者さんたちにとっても人気のある作業でした。利用者さんは福祉施設によって特徴がありますが、だんだんには精神に障がいを持った方が比較的多くおられます。なかなか外に出られない人、引きこもっていた人などをイメージしていただければ分かりやすいかと思いますが、そういった方が生活リズムを立て直したり、コミュニケーションの不安を取り除いたりといった目的で訓練を行い、経験を積んでいきます。畑での農作業は、施設内での作業と比べて広い空間で適度な

思います。利用者さんから「働きたい」という声が非常に多い中で、当時は病院の清掃などをスタッフの個人的なツテでさせていたのですが、なかなか長くは続かないという状態でした。三方原台地にあるだんだんの周りには畑がたくさんありますので、農家さんに「草取りなどの作業があればぜひ手伝わせて欲しい」と飛び込みで伺い、スタッフが2、3人の利用者さんを連れて農家さんにお手伝いに行くようになりました。

金田：こちらからお願いはじまった農作業でしたが、農家さんからの評判も良く、話を聞いた他の農家さんからも頼まれるなど、次第にたくさんの農家さんをまわらせていただくようになりました。現在では収穫や芽かき、ポットの植え替えなど色々な作業を受託しています。スタッフが利用者

距離感があるので、対人の緊張感や、作業に対するプレッシャーなどが和らぐ部分が大いだと思います。それに、やっぱり自然の中の作業は気持ちがいいですよね。

金田：農作業は開放的ですよ。適度な連帯感の中で、適度に気を抜くこともできるという環境がとてもいい面だと思います。また、生活リズムを作るといってもすごくいい効果があります。身体を動かして外仕事ですから、作業後は適度に疲れます。そうすると夜よく眠れますし、食欲も出ると身体的にも、精神的にも、良い循環が生まれるんです。

和田：それから農業にはすごく達成感があります。例えばミカンの収穫などでは、ひとつの木から全部を収穫するということが、それがすごく気持ち良く、自分でやり遂げたという感じることができる。それが他の作業だとなかなかない部分だったりします。

■農家さんとの信頼関係の中で生まれた変化

金田：農家さんとの間に少しずつ変化が生まれてきたこともあり



左：地域産「遠州綿紬」を使ったオリジナル商品の制作なども利用者が分担して行う。
右：バラの芽かきを行う施設利用者とスタッフ。適度な連帯感が生まれるのも農業の持つ特徴。



自然の中で開放感を感じられる農作業は、施設利用者にとって良い循環を生む。



北区・三幸町にあるだんだんは三方原台地のため、まわりに畑が多い。

ます。農作業に何度か伺ううちに、農場の方で少し工夫をしてきてくれていることが出てきたのです。

和田「以前伺ったたまねぎ農家さんでは、専用の器具でたまねぎの茎の部分をカットする際、手を切らないようにと鎌の先の部分に色テープを貼ってつけていました。少し心配をしていた作業ではあったのですが、おかげで怪我をした人はだれもいませんでした。

また、ある花農家さんでは苗を一定の長さに切るために、目安になる棒を用意してくれていました。このくらいの長さ、と言われるとなかなか難しいのですが、「この棒に添えてここで切る」というシンプルな指示になるととても理解がしやすいのです。その後、他のパートさんも同じ棒を使い作業がしやすくなったということでした。

金田「農家さんにとっては、障がいのある方のことを思いやってくれていることなのですが、それが効率の良い作業につながり、結果として同じ時間でもたくさん成果をあげることが出来る。単に業務のやりとりをしているだけでは生まれなかった変化が、農家さんと利用者さんが一緒になって作業することで生まれる。まさにユ

てきます。

金田「福祉事業所として仕事を請けているものはたくさんありますが、届いた原料を使って施設内で物を作るといった業務とは違って、農業はこの地域の方々との接点になっていくんです。やもすると地域の中で孤立した事業所になってしまいかねない私たちにあって、農業は地域との大切な橋渡しを担ってくれています。

和田「自然と関わること、人と関わることで、今まで外に出られなかった利用者さんがはつらつと働けるようになるケースもあっ

て、そんな姿を見ると本当に良かったとスタッフ共々感じています。今後も地域の農業の中で、私たちが良い役割を果たしていければと思います。

ニバーサル農業につながっていることなんですよね。

和田「障がいのある方のことを農家さんが理解してくれて、作業しやすい方法を見出ししてくれる。私たちの意見も尊重していただき、コミュニケーションの中でお互いにとって良い形が作れていることにすごく感謝しています。

■地域との接点として大切な役割を担う農業

金田「現在のだんだんは事業が多様となってきたこともあり、要望があってもなかなか受けきれない部分もあるのですが、毎日市内の農家さんに伺って何かしら作業をさせていただいています。

和田「地域に貢献できる仕事ですごくいいなと思っています。農家さんは「今日も助かったよ」と声を掛けてくれるので私たちもやりがいがありますし、自分たちの携わった作物が直売所やスーパーに並んでいることがあったりすると余計に嬉しいんですよね。車で走っていて、このミカンの木は私たちが切ったよぬなんて話をしているとその地域に愛着も湧い

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

株式会社ひなり (特例子会社)

中島 昌博



上：商品価値を落とさないよう正確な作業を求められることが、適度な緊張感を生む。
下：南区飯田町にある浜松事務所に、毎朝スタッフが集まる。

profile

1992年CRC総合研究所(現：伊藤忠テクノソリューションズ(株))入社。出光興産(株)のPOSシステム営業として主に新潟県・長野県の販売店店主への出光オンラインPOSシステム導入を担当。2011年からひなりに出向し、東京事務所と浜松事務所を管理。2016年4月から浜松事業所を担当する。

■特例子会社ひなりのはじまり

株式会社ひなりは、平成22年に設立し今年で6年目の特例子会社です。本社は東京にあり、親会社はIT系の伊藤忠テクノソリューションズ(株)という会社になります。特例子会社という聞きなれない方も多いと思いますが、日本では従業員50人以上を雇用する民間企業は障がい者を雇用する義務が法律で課せられていて、現在の法定雇用率は2%(5年毎に見直し)となっています。これを満たすため、事業主が障がい者の雇用に特別の配慮をして設立した子会社が特例子会社と呼ばれます。

雇用率を達成するために、本社では親会社の清掃やマッサージなどの業務を請け負っていました。将来的なビジョンとして障がい

者スタッフの新たな職域を開拓していかなければいけないという課題がありました。そこで、色々な調査を経て農業分野に取り組みたいと浜松事業所を開設しました。この地域の障がい者をスタッフとして雇用し、市内の農家さんから収穫や定植、除草作業などを請け負うとともに、こうした連携農家さんの生産物や加工品を親会社とグループ会社に向けて販売する事業も行っています。

事業所の開設にあたり、この浜松を選んだ理由のひとつは、周年での農作業が見込めるためです。私たちはスタッフを正社員として雇用しますので、常に請け負わさせていただく仕事が必要ではありません。他産地では季節的な作物が一般的である中、浜松では周年出荷している施設園芸がさかんです。市内全域で多種の農作物が作られているので、露地作物であっ

ても年間を通して何かしらお受けできる仕事があります。地域の農業者のみならず、福祉関係の方々との連携のもと、農作業の委託業務を行っているのがひなりのモデルです。

■企業として農作業委託を行う強み

技術の育成も必要ですし、効率的な業務の管理も必要となります。また、仮に食品事故があっても農家さんに大変な迷惑がかかりますので衛生管理も非常に大切です。その他、労務災害などに対する安全管理なども企業としての責務です。こうした中、企業として農家さんからのオーダーにしっかりと応えていくことで、信頼関係を築いていくことができます。

現在、浜松近郊の8軒の農家さんと委託契約を結んでおり、3〜4チームに分かれて毎日農作業に伺っています。従業員数は26名で、障がい者スタッフが21名、そして障がい者を支援・管理する立場のサポートマネージャーと呼ばれる職員が5名おります。障がい者スタッフは、サポートマネージャーと一緒に農家さんへ伺い、農作業をさせていただきます。農家さんにとっては収穫時期が特に人手の欲しい時期になります。ひなりではトマト、アスパラ、ミカン、ブルーベリーなどの収穫作業をさせていただいてますが、単に採れば良いというものではなく、農家さんの商品になりますので、一定以上の正確な作業が求められます。ですから、スタッフの

農家さんほどにも労働力の不足が課題となっています。一方で、人を雇用することはなかなかハードルが高い。例えば、賃金を払う以外にも労務管理などが必要になりますし、労働力の需要が一定の時期に偏っていることが多いため、ひなりには必要な時に必要な業務をお願いできるという点が、非常に助かっていると聞いています。実際、連携農家さんではひなりの作業を見込んで規模拡大を進めているところも多く、それに伴ってひなりの人員増も必要になってきているのが現状です。農福連携とは、農業と福祉の連携です。障がいのある方の働きたいという思いと、労働力を必要としている農業。そこにわたしたち企業が入ることうまく補完ができ、三者の



左：親会社がIT企業である強みを活かし、請け負った業務は徹底的なデータ管理を行う。また、障がい者スタッフの体調管理についても、サポートマネージャー同士が連携してデータに落としこみ最適なケアを行う。
 右：ブロッコリーの除草とトマトの収穫作業を行う障がい者スタッフとサポートマネージャー



依頼のあった作業に合わせて1チーム3～5人編成で作業現場に向かう。チームとしての一体感も大切。



作業が終わり事務所に戻ったスタッフたちは業務日誌をつけるのが日課となっている

良い連携が生まれているのかなと感じています。

■大切な役割を担うサポートマネージャー

農家さんからの率直な感想として良くお聞きするのが、障がいのある方たちがこんなによく仕事をこなせると思っていなかったというお話です。もちろん、障がいの特性もありますので業務のスピードなどはそれぞれですが、みんな一生懸命取り組みますし作業によつては私よりも3倍くらい早くこなすスタッフもいます。

新しい農作業を請けた場合は、私たちサポートマネージャーが農家さんから作業の手順を細かく聞き、画像を載せた「作業手順書」というものを作ってスタッフに指示をします。作業を見る化することで安心してみんな同じ作業をすることができずし、できないスタッフがいない場合には、技術のアドバイスをしたり、やりやすくなる道具を作ったりと工夫をします。サポートマネージャーの役割は、彼らができないことをできるように支援してあげることです。

一緒に作業をしながら気づいたことをケアしてあげることが大切で、農家さんにとっても、細かなオーダーを伝えられるサポートマネージャーの存在がとても大きいのです。

スタッフたちは本当によく働いてくれています。農作業に自信がついてきていますし、各々が責任感やモチベーションを持って取り組んでくれています。社内の雰囲気もとても良いので和気あいあいとしたコミュニケーションもとれていていきますし、業務に対する提案なども積極的に出してくれるので、働きやすい環境が色々と形になっていきます。もちろん私の立場としては人材管理の視点も持っていないといけないので、厳しいことを言わなければならない時もあります。家族のような気持ちでいつも仕事をさせてもらっています。

■企業ならではの役割をこれからも

今後も、企業に課せられる法定雇用率は上がっていくことがはっきりしていますので、親会社にとつ

て特例子会社の更なる職域の開拓が必要です。こうした中で、私たちは農業分野での雇用を増やしていきたいと思っています。企業としては、社会貢献(CS)のひとつとして行っているもので、そうした意味でもこの地域の福祉と農業をつなぐ今の良い連携の役割を果たしていけるといいですね。

農家さんから、ひなりを頼りにして農業経営をしているという声は多いので、今以上にこうした声に応えていきたい気持ちはありますし、現場に携わる私たちとしてはなにより、ひなりの障がい者ス

タッフが農家さんに頼りにされ、はつらつと働いていることが嬉しいことです。幸いここは離職率が低く、馴染みのみんなが働いてくれています。農業が魅力なのか、ひなりという会社が魅力なのか、いずれにしてもひなりに入ってくれたと、そう感じてもらえる会社でありたいというのが私たちの想いです。

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

スズキ果物農園

鈴木隆広



上：浜北区で営むスズキ果物農園のみかんはオリジナルブランド「たかのみかん」の名称で親しまれている。

下：今年経営を継いだばかりの隆広さんは、従業員として働いていたころから障がいのある方と共に汗を流してきた。

profile

浜松市浜北区宮口で果樹生産を行うスズキ果物農園・園主。「たかのみかん」「たかの梨」「たかのベリー」など、たかのブランドを展開するほか、ジュースやジャムなど加工品の生産も行っている。2016年1月より経営を引き継ぐ。

■スズキ果物農園での障がい者雇用のはじまり

当園は、浜北区でみかん・梨・ブルーベリーなど果物の生産を行う農園で、老若男女約20人が働いています。経営理念は、「食を育み、共に育つ」。農業を通して食を学び、人と人、人と自然の豊かな繋がりを求め、より良い暮らしを共に築ける農園を目指しています。

当園では、主に収穫作業などを障がいのある方をお願いしています。特例子会社の(株)ひなりさんへの作業委託が中心となっていますが、作業をお願いする量は年々増え、それに伴い農園の規模拡大にもつながってきました。

私は今年の1月に父から経営を引き継ぎましたが、障がい者雇用について検討をはじめたのは父の代からです。福祉施設から何か農

作業がないかと頼まれたことがきっかけで、はじめは草取りのお願いをしていたそうです。次第に、障がい者のみなさんが色々なことができるということが分かってきたことで、収穫などの農作業もお願いするようになってきました。

農家の私たちにとって、特に収穫期などはいくら人手があっても足りないくらいです。こうした課題の解決のため、静岡県西部地域の農業経営者たちが集まる「浜名湖アグリフォーラム」という組織の中で障がい者雇用がテーマとなり、農作業の受入れの調査を当園で実施したことが本格的な受入れのきっかけになりました。

その後、父と母で他県への視察なども行い、受け入れの形について研究を行っていたそうです。

その当時、従業員の一人として働いていた自分にとって、最初はやはり戸惑いがありました。何も扱いなどをアドバイスするだけで、あとは基本的にサポートマネージャーの方に任せています。また、製品化しているジュースやジャムのラベル貼りやお菓子の袋詰めなどを福祉施設の障がい者さんにもお願いしていますが、みなさん丁寧に作業してくれます。

農園の中ではパートさんたちもうまくサポートしてくれています。細かい部分で言えば、例えばみかんの収穫では、なるべく獲りやすい場所を障がいのある方に回してあげたりといったことですね。その他にも、農園の中に生まれてきた変化は色々あります。

農園の中であった変化の一つに、ブルーベリーを収穫する際のカゴがあります。果実の収穫の際、採った実をA品とB品に分ける作業はそれまで間仕切りのある一つのカゴを手持ってやってきましたが、新たに腰に付けるカゴを用意したことで、『手に持ったカゴ』と『腰につけたカゴ』とを明確に指示ができるようになりました。

知識がなかったので、どう接していいかわからなかったというのが正直なところです。ただ、実際に働いてみれば普段の色々なコミュニケーションをとっていく中で、自分を含め他のパートさんたちもすぐに慣れてきました。こういうことに注意してあげる、こういう言葉をかけてあげるといい、というようなことも分かってきて、自然にそういった配慮をし合う環境ができてきました。

■ひなりを中心とした農作業委託

現在、ひなりさんにみかんやブルーベリーの収穫を作業委託しています。農園として計画している量を委託し、きっちりとその分を収穫していただけるので、急な休みなどがどうしてもあるパートナーと比べて計算が立ちます。経営の中でもしっかりと見込みを立ててにして新たに農地を借りるなど農園の規模の拡大にもつながってきました。

ひなりさんへの委託に関しては、自分は収穫の仕方や農産物の

■農園の中で生まれた変化

農園の中であった変化の一つに、ブルーベリーを収穫する際のカゴがあります。果実の収穫の際、採った実をA品とB品に分ける作業はそれまで間仕切りのある一つの

カゴを手持ってやってきましたが、新たに腰に付けるカゴを用意したことで、『手に持ったカゴ』と『腰につけたカゴ』とを明確に指示ができるようになりました。



左：高所での作業や、細かい作業を必要とするみかん果実の二度切り（実から出た茎を根元で切る作業）も難しくなす。
 右：従業員みんなで考えて製作した、ラベル貼りのための治具。ジュースやジャムなどのボトルへのラベル貼りを均一に、効率よく行うことができる。



委託する作業については、まず農産物の特徴や取り扱い方について細かく教える。農産物のことをしっかりと理解してもらうことが大切。



妻・真由美さんは元々福祉施設に勤めていた経験を持ち、良きアドバイザーでもある。

と喜んでもらえて、あのお店で売っているの見てきたよ！なんて声をかけてくれます。そんなところも自分にとって嬉しいことです。
 とはいえ農作業に関しては、向き不向きもあります。ちゃんと適正を見てあげることも必要です。し、接し方の配慮なども必要です。ので、福祉の専門家をお願いする部分もあります。そうした機関へつなげたりといったことも、地域社会でカバーができることではないかと思っています。
 昔はあまり聞くこともなかった引きこもりといった言葉も、最近

はよく耳にするようになってきました。地域の中にはそういうことで苦しんでいる方も多くいるのではないかと思います。地域に根付いた農業だからこそ、地域の中で果たせる役割もある。何かしら障がいを持った方が、私たちの農業を通して社会復帰につながればいいですね。

また、ルール化やマニュアル化ということも次第にできてきました。例えば、畑の中にとりどころの危険な切り株や大きな石などがあつたり、または絶対に踏んではいけないホースがあつたりします。自分たちだけが作業するのならば、頭の中に入っているのが、これらを気にしながら作業をするのですが、障がい者さんに分かるように危険な箇所を避けた通り道を作って、この圃場ではここを通るということをルール化しました。すると、パートさんたちも含めみんなが守るルールになり、圃場の危険が防げ、作業の指示もしやすくなりました。明確に指示ができるように形を少し変えることで、ルール化やマニュアル化ができるようになり、安全性や効率性を高めることができるようになったのです。その他のことに関しても、文章化したり、行程表を作ったりという習慣が少しずつできってきました。こうしたことは、経営者としての自分にとっても、例えば新たに規模拡大をする場合に誰もが作業しやすい圃場の整備を考えると、きつかけになっていると思います。

貼るラベルについても変化がありました。タブの正反対の位置に貼ることや、同じ高さに合わせることは健康者にとっても意外と難しいのですが、これまでは感覚と経験でやりくりしてきました。これを障がい者さんが作業できるようにするため新たに治具を作り、タブの位置を下に固定してその上面にシールを貼る、高さはびんと張った糸を上辺に合わせて貼るという指示のできるものになりました。今はその治具を改良した2代目になっていて、みんながやりやすい道具になっています。

■地域に根付いた農業だからその役割を

現在は、お互いが配慮してあげられるいい職場環境ができています。自分にとって始めはあつた戸惑いも今はもうほとんど感じることはなくて、なんとか自然に配慮して、自然に接してあげられていると思います。

また、障がい者のみんなにとっても農業に関わることは嬉しいでしょう、例えば自分が作業に関わったものが店頭に並んでいたたりする

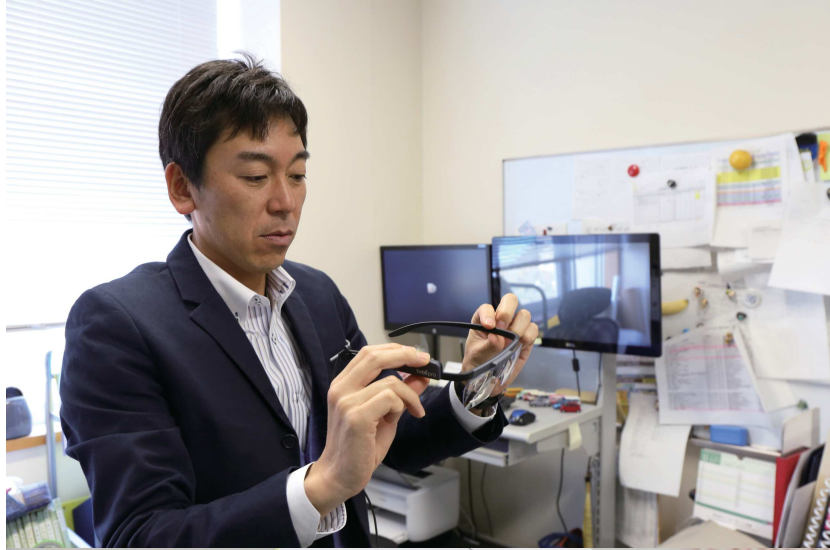
“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

聖隷クリストファー大学

建木健



上：現在、研究室ではVR（バーチャルリアリティ）を活用した自動車運転の可否判断に関する研究も行っている。

下：虫とり機の製作については書籍でも紹介される事例となった。

profile

聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部作業療法学科助教として、主に高次脳機能障害のリハビリテーションの研究を行う。(公社)静岡県作業療法士会・理事のほか、NPO 法人えんしゅう生活支援 net の理事長として NPO の運営にも携わり、研究と実践活動を通して農業・福祉・医療の連携に取り組む。

■聖隷クリストファー大学とNPOでの活動

聖隷クリストファー大学は、医療・福祉に関する学問を学ぶ大学です。私はここで、リハビリテーション学部作業療法学科に助教として所属し、主に「高次脳機能障害」という障害に対するリハビリテーションを専門分野に研究しています。高次脳機能障害とは、あまり馴染みのない言葉かと思いますが、脳の損傷により、身体の機能は保たれているのに脳の精密な情報処理や指令がうまく行えず、生活や仕事で困難を生じる障害のことを言います。事故や病気などが原因で起こる障害で、周りからは健常者とそれほど違いがないように感じられるのですが、段取りや手順を効率良く行えなかったり、怒る・悲しむ・喜ぶなどの感情が目立つ感情失禁、また記憶障害など

が主な症状にあり、全国に約30万人いると言われています。こうした障がいのある方がリハビリテーションを通して少しずつ機能を回復し、社会復帰できるための研究をしています。

また、研究だけではなく実践的な部分まで補えないことから、NPO法人えんしゅう生活支援 net という法人を立ち上げ、障がいを持った方のリハビリと活動の場を作っていて、そこで農業・福祉・医療の連携をテーマの一つにしています。具体的には、NPOとして「ワークセンター大きな木」「ワークセンターふたば」という大きく2つの事業を行っておりまして、「大きな木」では自分たちの畑を持ち、そこでジャガイモ、大根、玉ねぎ、にんにくなどいろいろな作物作りを、障がいを持った利用者さんにリハビリとして行ってもらっています。また、「ふたば

では中区中央にある LaLa Cafe というカフェを運営していて、畑で作った野菜を使ったカレーなどのメニューを提供しています。カフェでも障がい者の方々に料理や販売などに携わってもらっていて、こうした色々な作業を通して、実践的な就労プログラムを行っています。

私は医療という立場で農福連携に関わらせていただいています。が、園芸福祉や園芸療法といった言葉もあるように、リハビリテーションの視点においても農作業には、例えば認知力・判断力の向上、両手動作や目と手の協調運動、斜面での歩行訓練や立ちしゃがみなど、たくさん効果的な訓練要素が含まれています。

■人を活かす機械の製作をきっかけに

浜松市のユニバーサル農業に関わるようになったきっかけは、以前、京丸園さんから「虫とり機」の製作について相談をうけたことが始まりです。水耕栽培している作物の上に大きな車輪が付いた掃除機のようなものを手で移動さ

京丸園さんとしては障がい者が扱う前提の機械、つまり人を減らす機械ではなくて人を活かす機械を作りたいという要望でした。そこで大学のリハビリテーション学部で声をかけていただき、障がい者にとって扱いやすく、また同時にリハビリの効果も得られるものを作ること、産学農の共同により作りました。

具体的には、作業工程を細かく分解して整理し、なるべく工程をシンプルにしたり、障がい者のゆっくりに合わせたベースに合わせた回転軸にしてブレーキを設けるといったことをしたのですが、製作会社さんとしてはわざとゆっくり動く機械を作るなんてことはなかなかないということでした(笑)。経営の中で導入する機械ですので、作業効率や製作コスト、そして作業者の訓練要素がバランスを崩さないよう形にすることが大切で、自分



左：「ワークセンター大きな木」では、畑も機具も自前で調達。農業における訓練的な要素も重視しながら色々な野菜を作る。今年の冬はサツマイモ、ダイコンなどを収穫した。

右：妻・良子さんが所長として運営する「LaLa Cafe」（中区中央）では、「大きな木」の畑で採れた野菜を使い、カレーやパスタなどの料理を提供。地域住民の憩いの場となっている。



農業は、リハビリテーションの視点からも多くの効果的な訓練要素を含んでいる。また、目に見える成果を実感できる点も特徴。

にとってもリハビリのための農業を改めて考察する機会になりました。

■ユニバーサル農業から生まれた現在の研究

こうしたきっかけをもとに、現在、「障がい者の農業参画に向けた農業工程管理カルテ」という研究をひとつ進めています。農業者にとって障がいを持った方を雇うというにはある意味、未知の部分があります。そこで、この研究では、障がいを持った方の機能・能力をそれぞれ個別に分析し、何ができないかということを数値化します。一方、同じように農業ひとつひとつの作業を分析し、例えばチンゲンサイの定植や玉ねぎの箱詰めにはどんな機能・能力が必要かということを数値化します。最終的に、これらをマッチングして、この人にとってこの作業の適正がどの程度あるかという数値を算出していく、といったことをしています。

多くの事例の積み上げが必要になりますし、形にするにはまだまだ時間がかかりますが、障がいを

持った方の農業に対する適正を客観的に数値化することで、目に見えない不安や経営リスクを解消するひとつのツールになると思っています。また、リハビリの面においても、どんな作業が望ましいとアドバイスができるようになる。この先もいろいろな方の協力が必要なことですが、なんとかいい形にできるといいですね。

■これからの社会、これからの農福連携のために

近年、農福連携という言葉がさかんに聞かれるようになってきました。浜松では農業と福祉、また企業との連携も生まれています。そして、私たち「医」との連携も大切なキーワードだと思っています。障がいのある方にとって働くということはすごく重要なことで、福祉施設での訓練ではなかなか気が入らなかった方が、雇用されて賃金をもらう立場になることで、大きな責任感を持つてはつらつと働くケースをたくさん見えています。これからもそういう後押しができるためには、研究という場で

の考え方だけでなく、障がいのある方が社会に出てどのように働いてくかという視点が重要だと思っています。研究で良い結果が出たというだけでなく、社会や産業の中で効果的に機能する形、事業で言えばしっかりとしたビジネスモデルになるということを考えていかなければいけません。そういう意味で、実践的なNPOでの活動にも色々として取り組んでいるところではあります。

福祉と医療というのは近いようで意外と切り離されがちなところがあります。そこを様々な研究や

活動を通してシームレスにしていることが、自分の役割だと思っています。病院や福祉施設という枠を超えて、障がいのある方がはつらつと働いている社会。農業・福祉・医療の農福医がより良い連携をつくりあげていくお手伝いを、これからも続けて行ければと思います。

取り組みを身近に感じてくれている学生たちの存在も大きい



“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

まるたか農園

鈴木 崇司



上：ハートのマークが入ったオリジナル商品「ハビフルトマト」の開発など新しい取り組みも積極的に行っている。

下：元気な挨拶や趣味の話など、日々のコミュニケーションが農園の明るい雰囲気づくりにつながっている。

profile

浜松市北区都田町で、中玉トマト、ミニトマト、梨の生産を行う「まるたか農園」を運営。自身のアレルギー体質による経験から、健康へ配慮した有機肥料を中心とする土耕栽培を行う。平成27年度静岡県ふじのくに未来をひらく農林漁業奨励賞を受賞。

■近年、規模拡大を果たしてきたまるたか農園

当園は、北区都田町でトマト・ミニトマト・梨を生産している農園です。健康な食材を通じて食生活を豊かにすることや身体の健康に貢献すること、また食育を通じて未来を担う子供たちが豊かな人生を作るお手伝いをすることを経営理念としています。

農園では私のほか従業員1名、パートさん5名と両親が働いていますが、そのほか作業委託として主に特例子会社の(株)ひなりさんへ収穫作業をお願いしています。ひなりさん以外にも作業を請け負ってくれる福祉施設に除草作業をお願いしたり、果実ジュースの加工販売している施設にトマトを卸すなど、地域内の福祉分野の方々と何かと連携をさせていただいています。

■ひなりとの連携のはじまり

ひなりさんに農作業をお願いするようになったのは、ちょうど4年ほど前になりました。

もともと当園ではパートさん2名を雇って中玉トマトの生産を行っていましたが、そんな頃、新たに畑を借りてミニトマト生産で規模拡大をしないかという話がありました。せっかくのお話ではあるものの当時のうちの労働力では

難しいと思います、お断りする方向で検討していたのですが、ちょうどその時に農作業受託をしているというひなりさんを紹介してくれる方がいて、試しにミニトマトの収穫をやらせてみてくださいませんか？という提案もあり、試験的に圃場の一部で栽培と収穫を行うことになりました。正直、最初は障がいのある方に収穫の作業ができるかな？という気持ちがありました。

それまで障がい者さんと関わることはほとんどありませんでしたし、どの程度の作業ができるのかが全く分からなかったのです。実際にお願ひしてみても、本当に助かったというのが率直な感想です。当初は、収穫適期の実とそうでないものの判断が難しいところもありましたが、サポートマネージャー（障がい者スタッフと共に来て作業の管理をしてくれる健康者）とともに客観的に識別しやすい方法を検討するなど色々と工夫をしていく中で、だんだんと慣れてきました。作業の内容や計画などについては、全てサポートマネージャーと話しています。計画した作業量をきっちりとしてくれますし、その日にあったことや数値的なことなど、細かな部分も報告

してくれるのでとても助かっていきます。

■農園の中で起こった変化

ひなりさんの提案から、農園に変化のあったこともあります。ひとつは、作業している人の名前を書いた看板を列の入り口につけるようになりました。この人がここまでやっているか誰かが分かるようになり収穫作業が効率的になったのですが、こうしたことは簡単



左：4年間でトマトを生産するハウスは2倍となり、新たな販路の開拓にもつながった。
 右：サインの設置や通路が広くなるなど、誰もが動きやすい圃場へと変化してきている。



農作業を委託する農業者として、作業の管理を全てお願いできるサポートマネージャーの存在が大きい。



4年前、5反(約5千㎡)だった栽培面積も、現在2倍となり、今も規模拡大を計画しています。農園で障がいのある方の受け入れをしていると、時には社会貢献のような視点で反響をいただくこともあるのですが、正直、僕自身は福祉のために何かをしているという意識は全然なくて、ただただ皆さんのおかげで今の仕事ができるのが率直な気持ちです。こうしたことにお返しするためには、なるべく一年を通してお願いできる仕事を作らなければいけない。今は助けてもらっている一方で

地域の農園としての役割を果たしていくことも、経営意欲のひとつとなっている。

なことのようにでなかなか自分たちでは気付かなかったことです。今はパートさんにも同じように看板をつけてもらい、農園全体で実施しています。それから、通路を広くとるようになりまして。これまでは自分だけが作業することを考えて圃場を作ってきましたが、誰もが作業しやすい環境整備を意識するようになったことで、障がいのある方にも、パートさんにも、また自分にとっても良い環境の農園になってきていると思います。また、ひなりさんをお願いするようになった頃から、新たに作った販路もあります。通常、ミニトマトはへたがついた状態で出荷するためへたを残して収穫をするのですが、少し技術を要するので収穫作業のネックになっていました。これは、障がいのある方の作業に限った話ではなく、パートさんが作業する場合でも同じように神経を使う部分でした。そこで、へたを取った状態で出荷できる販売先も新たに確保しました。今は収穫者や販路によって収穫物をコントロールできるようになり、良いきっかけになったと思います。

■農業経営者としてのこれから

安全性とおいしさにこだわった農産物を作りたいという想いで就農した当時、僕はトマトを作ることに全てを自分でやらなきゃいけないと思っていました。それが、ひなりさんとの連携をひとつのきっかけとして、誰かにお願いできる、助けてもらうことができるんだということが分かってきました。やはり、人それぞれで得意なことと不得意なことがあります。それは障がい者の方に限ったことではなく、パートさんや、自分自身のことについてもそう。僕よりも、障がい者スタッフさんやパートさんのほうが上手にこなす作業もあります。だから、今はそういう皆さんが働くこの農園をどううまく回るようにするか、ということに意識が向くようになってきました。作物作りに関しても、以前はとにかくおいしいトマトを作るといふ事だけを考えていましたが、今はお願いする仕事を作りだすことや、より良い職場環境を作るといった、広い視点で農園のことを考えるようになってきていると思います。

が、今後も規模を拡大し作業を作り出していくことが、お返しに繋がるのかなと思っています。これからも、この農園で働いてくれるみんながそれぞれの力を発揮してくれること、そうした力を借りていくことで、地域の農園としての価値が高まっていけば嬉しいですね。

鈴木泰子



上：スタッフ7名が働く職場は、明るい雰囲気笑顔がたえない。
下：労務管理を請け負う農園でも、コミュニケーションを大切にしている。

profile

浜松市東区大島町で1997年鈴木泰子社会保険労務士事務所を開業。農業分野における労務管理を多数手がけるほか、行政機関等からの依頼により農業経営者向けの労務講座を全国で精力的に行う。静岡県社会保険労務士会浜松支部理事、全国農業経営支援社会保険労務士ネットワーク理事、NPOはままつ子育てネットワークびっぴ理事など多数の役員を務め、活動は多岐に渡る。

■農業分野での労務管理サポートを専門的に

当事務所は、東区大島町に事務所を構える社会保険労務士事務所です。現在、私を含め7名のスタッフで建設、製造、販売関係など様々な業種の事業者さんのお仕事をさせてもらっていますが、農業者の方からご依頼いただいているお仕事も多く、市内外の農園の労務管理や社会保障制度の整備のお手伝いをさせていただいています。

また、農林水産省や県・市などの行政機関のほか、農業協同組合中央会や農業会議などから講師としての依頼を受け、農業経営者に向けた労務講座もさせていただいています。全国いろいろな地域に伺って講演することも多いので、様々な方とのつながりができたり、また私自身視野を広げることができ大変うれしく思っています。

す。

こうした農業関係でのサポートをさせていただくようになったのは、事務所を開業後まもなくした頃に、恩師である中小企業診断士の先生から「農業の労務ができる人を探しているんだ」と声をかけていただいたのがきっかけにあります。私は、兼業農家の子として生まれ、農業に誇りを持って働く母の姿を見て育ちました。私なら農業の大変さや農家の気持ちがかかるだろうとご紹介いただいたのですが、こうした分業に自分ごとが関わることにも感謝しています。

また農業は単に農作物をつくるだけでなく、環境保全や教育など非常に多面的な機能を持った産業です。こうした分野に自分の仕事に関われることにも感謝しています。

■農業者とともに取り組んできた障がい者雇用

こうして農業における労務管理のお仕事させていただくようになりましたが、障がい者の雇用、つまりユニバーサル農業について関わるようになったのは、お付き合いのある農園から障がい者雇用を経営に取り入れていきたくいと相談をいただいたのがきっかけです。

当時、農業者にとってはもちろん、私にとっても大きなハードルだと思いましたが、農業経営の発展につながるだけでなく障がいのある方の手助けにもなるのではない、様々な支援制度も学ぶなど、実践を通して試行錯誤しながら取り組んできました。今では他の農業者さんの障がい者雇用や、福祉事業所との連携も支援させていただいています。

障がい者さんが働くようになった農園では、作業の見直しによる経営改善や、職場にやさしい空気が生まれるなど、良い変化は様々あります。ただ、障がい者雇用を進めるためには、やはりその前に通常の雇用ができる環境を整えることが必要です。ご存じのとおり、誰かを雇用するためには、社会保

■変革の時代を迎える、現在の農業

障や労務管理など様々な労働環境の整備が必要となりますが、こうした保障は障がいのある方にとってはより必要なものです。人を雇うということも掘り下げて考えていく意味でも、障がい者雇用は良いきっかけになっていると思います。

「雇用型農業」という言葉があるように、今農業が変革していく時代が来ていると感じています。これまでの農業は、家族経営が主体にありました。その中には雇用のために必要な社会保障制度のほか、就業時間や休暇などの条件も整備されていないことが多いのが現状です。もちろん、こうした従来の家族経営の形も大切なものですし、メリットもあります。ただ一方で、耕作放棄地や後継者不足など様々な課題を抱えるのが農業を取りまく現状です。こうした中で持続的・発展的な農業を目指し、雇用型農業に取り組もうと、私たちのところに相談に来られる農業者さん達が多くなってきました。



左：職場でもスタッフとの明るいコミュニケーションを大切にしている。職場環境の改善、人材育成など自分自身も経営者として試行錯誤しながら、社会に貢献できる組織活動を目指している。

右：農業経営のための労務管理をサポートする様々な活動は、メディアで紹介されることも多い。



「雇用型農業」を目指す農業者のかけこみ寺として日々相談を受ける泰子さん。農業者にとって経営改善に向けた意識改革が大切という。



信頼できるスタッフたちとともに、志を持った農業者たちを支援できることがなによりうれしい。

福祉分野の色々な人とつながりができることで、広い視野を持つことができ、連携が生まれ、それは社会にとって大きな相乗効果を生みます。私は、こうした先に農業のトッランナーが生まれるのではないかと思っています。

これから農業がいろいろな方の力を味方にし、発展していく時代の中で、私たちもできる限りのサポートができればいいですね。

雇用型の経営になるということは、経営者のマネジメント能力が求められることになります。人を雇うってすごいことなんですよね。人を雇うことで、考えないといけないこと、勉強しないとできないことがたくさん出てきます。また失敗もたくさんして、それを乗り越えるための自分なりの方法が身につけていく。こうした経験こそが、経営者のマネジメント能力を伸ばすものだと思います。私自身も開業の経験がありませんし、サポートさせていただいている農業者のみなさんを見ていて、も本当にそう感じているところなんです。いろいろな苦労や経験を踏まえて、良い職場環境が生まれ、人材が育ち、従業員がはつらつと働く会社が次第に形作られていく。そういう経営者は人として魅力的ですし、自然と人が寄ってきて良い経営が成り立ちます。

私はいつも、雇用を発生させるということだけでそれは素晴らしい社会貢献だと思っています。もちろん前提に利益をあげることが必要で、簡単にはいかないのが経営です。だから、できることから少しずつできればいい。その先で、一緒に働く喜び、働きがいや生き

がいや創出できる経営者は素敵ですね。

■これから迎える新しい社会とユニバーサル農業

これからの社会は、みんなが働いていかないとけない社会になると思います。現実問題として人口減少が目前にあり、労働者の数は減っていくのですから、農業も働いてもらえる環境を整備していかなければいけません。昔と違い女性が働くのも一般的になりましたし、高齢者や外国人など、様々な方が今後はもっともっと働く社会になります。

障がい者雇用というテーマは、そうした大きなくりの中の一つだと考えています。これから先、こうした方々を農業に受け入れて定着してもらうためには、農業者の意識改革や社会全体の取り組みが必要です。まさにユニバーサル農業の概念がそうした取り組みにつながるのではないのでしょうか。

また農福連携によって、農業者がグローバルな視野を身に着られることも大切なことだと思います。通常であれば関わりの少ない

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

takayamarose

高山 隆



上：takayamaroseでは要望にあわせて様々な提案ができるよう、多くの品種のバラを生産している。

下：障害者施設との連携によって、農園内にはより明るくやさしい空気が生まれるようになった。

profile

浜松市北区都田町で、バラの生産を行う takayamarose を経営。直売所を併設した温室で32品種のバラを年間約30万本を生産する。「幸せを応援するバラ園」をコンセプトに生産のほか加工や販売など、地域に密着した事業展開を行う。

■障害者支援施設との連携のはじまり

当園は、北区都田町でバラの生産を行っている農園です。栽培のほか、花束やフラワーアレンジメントなどの加工販売、ウエディングブーケや会場装飾といったブライダル事業などを通して、「幸せを応援するバラ園」を理念に経営させていただいています。

当園では、5年ほど前から障害者支援施設の利用者さんに農作業をお願いするようになりました。今は2つの施設からそれぞれ週1回ずつ来ていただき、圃場での色々な作業をお願いしています。また現在、出荷調整作業のひとつとして、収穫したバラの長さを揃える「切りそろえ」の作業についてもお願いできるよう打ち合わせを行っています。

障がい者さんに農作業をお願いする状態になりました。そこで、他の作業もできないかと検討し、不要なわき芽を摘み取る「芽かき」という作業もお願いするようになりました。今は必要に応じて色々な作業をお願いしています。

当園に作業に来てくれていた障がい者さんたちはとにかくまじめです。こちらの声かけ次第という部分もありますが、とにかくみんながんばってくれているので心配になっってしまう時もあります。ですから、心配なことがあればしっかりとジョブコーチ（障がい者の作業支援を行う専門員）と状況について話をするようにしています。

また、パートさんたちとのコミュニケーションもよくとれていると思います。パートさんたちはとても面倒見がよくて助かっていいるところがある分、自分の子どものような感覚で付き合っているのかもしれないですね。農園内で笑顔や会話もすごく増えて、なんというかやさしい雰囲気が出ています。なかなかなか作ろうと思って作れるものではないので、代えがたいことだと思っています。

農園の中での変化も色々あり

するようになったきっかけは、5年前に静岡県の農福連携事業の一環で障がい者の農場実習先として選んでいただき、その受け入れを行ったことから始まります。当園では、最初にバラ圃場の掃き掃除をお願いしました。バラの栽培をしていると、栽培棚の下に枝や葉っぱが自然と溜まっていくのですが、これを放っておくと湿度がたまり悪影響が出てしまうため定期的に掃き掃除を行う必要があります。ただ、他の作業に追われているとなかなかまめに言うことができず悩んでいた部分だったので、とても良いタイミングでした。

■農園で起こった変化

圃場の掃き掃除をお願いしてしばらく経つと次第に作業が早くなっていき、むしろ手が余ってしま

ますが、とにかく「表示をする」ということが習慣になりました。例えば、冷蔵庫のここには何が入っているということや、扉を空けてから探す手間や空調のロスが少なくなり、作業をする通路は、トゲが刺さらないようバラを一定方向に植えているため、一方通行になっています。通路によってその向きが違っているため、全ての通路に表示を付けたので、そのほか、効率よく作業するための道具もこまめに用意するようになりました。自分達だけならちょっとのことは無理して作業してしまつたため、いずれもわざわざ改善するという発想がなかったことです。小さなことの積み重ねですが、全体としては大きく効率化できてきました。また、新しく入ってきた人にも分かりやすく、作業のしやすい環境になってきていると思います。

■「自分しかできない」が「誰にでもできる」に

こうした農園の中での変化のほかに、僕自身の変化もすごくあり



左：現在、バラの長さを均等にそろえる出荷調整作業について検討を行っている。こうした打ち合わせが、現行の作業工程を見直す絶好の機会となる。

右上：福祉施設との連携によって農園に生まれた変化のひとつが、通路の進行方向を示すサインの設置。

右下：農副連携やブランド戦略など農園の取り組みを紹介する機会も多い



ジョブコーチや障がい者さんたちは、既存の農作業に新しいアイデアを生み出してくれる大切な存在。



妻・晴美さんとともに、フラワーアレンジメントや販売事業を展開。バラを通じた豊かな暮らしの提案を行っている。

自分が持っている視点を持った先生のような存在だと感じています。僕たちとは違いできないことがあるからこそ、自分がやれる方法をいつも考えているのが自然で、だからきつと僕たちでは思いつかないようなアイデアが生まれるんだと思います。

一般的に、農業は大変な世界だという印象がやはり強いと思います。そういう中で今後、会社を大きくし、維持発展していくためには、僕たちが働きやすい環境を作っていかなければいけません。これからも福祉関係のみなさんの力を

借りながら、みんなにとってより良い環境を作り、たくさんの方の幸せを応援できるバラ園を作り続けていければと思っています。

ました。福祉分野の方というのはとにかく、今できない作業をどう工夫してできるようにするか、という視点でアイデアをくれます。道具を加えることだったり、作業を分解することだったり、色々な角度から工夫をします。それは、今ある作業工程の根本的な改善に直結することが多いのです。だから僕は、ジョブコーチや障がい者みなさんにより良い方法はないかということは何度も聞くようにしています。自分では気付かなかった作業の欠点や、思いつくことになかったより良い方法が生まれることを期待しているんです。

障がい者の方々と仕事をするようになって自分自身に起こった大きな変化は、「僕にしかできないと思っていたことが、誰にでもできる」ということが分かったことだと思います。農家にとって、こうした気持ちの変化はとても大きなことなのです。「農業は職人的な作業の連続であって、経験のある自分にはできない」と思っていたことが、別の視点を加えることで作業の単純化や平準化が生まれ、だれもができる作業へと変化するのです。作業を改善しながら他者に任せるという感覚も次第に身に

■福祉と連携したこれらの農業経営

これから先は、労働力がどんどん減っていく社会になります。そういう中で、障がい者さんたちが救世主として、今後大きな役割を担ってくれると思っています。僕は、いつも障がいのある方は

ついてきました。

こうした自分自身の変化は、今の農園の経営にもつながっていると思います。以前は、作業を従業員やパートさんをお願いし、僕が全ての作業管理をするという形で運営をしていました。今は、障がい者さんに作業をお願いできる部分が生まれたことで、従業員やパートさんに僕がそれまで行っていた管理の部分を少しずつお願いしています。そうすることで、僕が常に農園にいる必要がなくなり、事業連携やブランド戦略など経営に関するより広い分野での活動ができるようになりました。まだまだ改善していかないといけない部分はありますが、組織として良い形が生まれてきているのではないかなと思っています。

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

一般社団法人ノーマポート

高草 志郎



現在、障がい者の職域開拓として大きな注目を浴びている農業。自身の経験をもとに、農業参入を目指す企業のサポートを行っている。

profile

神奈川県横浜市に事務所を構える一般社団法人ノーマポートの代表。2011年から伊藤忠テクノソリューションズ(株)の特例子会社(株)ひなりの代表取締役社長を5年間務め、特に浜松において農福連携モデルに取り組んだ経験を活かし、関東圏を中心に企業の障がい者雇用や農福連携をサポートする。

■障がい者雇用をめぐる企業の現状

一般社団法人ノーマポートは、企業の障がい者雇用拡大のための農業分野への職域開拓支援、企業内のサポーターのスキルアップ研修などの業務を行っています。私自身、伊藤忠テクノソリューションズ(株)の特例子会社(株)ひなりの社長という立場で昨年まで携わってきた経験から退職後ノーマポートを立ち上げ、障がい者雇用を進めようとする中小企業のご相談に乗ったり、福祉事業所などに農福連携モデルを紹介したり、また障がい者の就労支援などをさせていただいています。

障がい者雇用においては、「障害者の雇用の促進等に関する法律」で「法定雇用率」というものが定められていて、現在民間企業においては2.0%となっています。これ

は従業員50名以上を雇用する民間企業に対して障がい者を雇用する義務が法律で定められているもので、平成20年に1.8%、平成25年に現在の2.0%に改定されました。法定雇用率は5年ごとに見直されることになっているので平成30年の4月には増率改定されることになっており、これに向けて障がい者雇用をさらに進めているというのが各企業の状況です。

こうした法律に基づいて、企業は障がい者雇用に取り組んでいますが、とりわけ、大手企業にとっては雇用する従業員が多いことから、さらに雇用率を上昇させるということは決して容易ではありません。企業では総務関連事務やデータ入力、清掃・印刷業務などを中心に障がい者の業務を作り出していますが、多くの企業では、すでに飽和状態にあるこうした業務にさらに障がい者を配置するのは難

しい状況にあります。今後、雇用率が上がっていくことがはっきりしている中、雇用する障がい者の職域開拓というのが差し迫った共通の課題となっており、こうした中で、全国の企業から現在大きな注目を浴びているのが農業という分野なのです。

■農作業受託という新しい農業参入モデル

このように障がい者の職域開拓という視点から農業に参画している企業があります。自ら植物工場などの施設を整備し、障がい者が農作業を行う形で直接農業経営を行う事例もありますが、やはり企業としては投資や採算性などリスク分析が最も重要なことです。多くの企業にとって、農業というこれまで関わりの少なかった新しい分野に踏み込むことには大きなハードルがあるのが現状です。

こうした中、平成22年に浜松事務所を開設したひなりのモデルは、農作業を業務委託契約によって請け負うという新しい農業参入の形です。5年間、社長という立場で取り組ませていただきました

が、企業にとっての職域開拓とともに、農家さんにとって必要な人手を補う事のできる良いモデルケースとなっていると思います。

農作業受託という形は、企業が行うことで大きなメリットがあります。農家さんにとって大切な商品を取り扱うものであり、商品管理や衛生管理、作業品質の確保ということとはしっかりと責任もって行います。また、障がい者の視点からみると、適切な労務管理のもとで働くことができますし、育成プログラムのなかでしっかりと成長を実現していくことができます。障がいのある方には作業が得意なという印象を持たれることが多いのですが、決してそんなことはありません。もちろん障がいスタツフ(以下、スタツフ)の障がい特性によって作業内容に向き不向きはあります。ひとつのことに集中して取り組める人、多様な仕事を起用にこなす人など色々なスタツフがいて、適切に教えることができればしっかりとできるようになりま。中には健康者より仕事早いスタツフに成長している姿も見ているので、障がい者の仕事として農業は十分やっていると云えます。特に、農業には心



左：自身の経験を活かし、企業と福祉・農業をつなぐ役割として、これからの社会に貢献できる活動を続ける。

右：障がい者の職域開拓のため農業参入を目指す企業への講演のほか、障がい者スタッフの管理者（援助者）の育成に関する企業内研修なども行っている。



ユニバーサル農業研究会における調査事業においてもアドバイザーとして携わり、農福連携の推進に取り組んでいる。

身面での良い効果もあり、知的障がいや精神障がいを持った人には農業が非常に合っていると実感しています。

■農業分野で果たせるもう一つの社会貢献

農作業受託をスタートした頃は、苦労したこともありましたが、特に農業は人手の必要な時期とそうでない時期がはっきりしていますが、スタッフを雇用している立場としては年間を通じた仕事を作らなければなりません。農家さんをまわって作業を委託してもらうための営業をするのですが、そこで大きな壁となったのはやはり障がい者スタッフに対する第一印象でした。障がいのある方に農作業は難しいだろうという意見がほとんどで、私たちにはちゃんとしていくことができるというものが分かっていのですが、農家さんはなかなかそうは思ってくれません。ですから、最初はとにかく試しにやらせてみてくださいとトライアルの形で仕事を請け、農家さんに納得していただいで契約するというふうに請負先を広げていきました。

■多様性の時代の中で企業が果たす大きな役割

農福連携において、農業者にとっても農業経営における様々な変化

やメリットの声が生まれてきました。お互いの連携の中で農業をしっかりとして掘り下げていけば、障がい者が担える作業というのはまだまだたくさんあるだろうというのは率直に感じているところで、障がい者の職域開拓を進めていく企業にとって農業分野への可能性は一層広がっていくと思います。浜松市のユニバーサル農業においては、以前より農業と福祉の連携に企業が参加することで三者のそれぞれの課題を解決する取り組みになるという考えがあったわけですが、ひなりが参加したことで農福企業連携の一つのモデルが確立されたと思います。農業にとっては人手不足の解消、福祉にとっては就労の機会の拡大、企業にとっては障がい者に適した職域の確保ということですね。

企業にとってCSR（社会貢献）や法定雇用率を達成するというコンプライアンス遵守（法令順守）は当然のことですが、障がい者が会社の中で働くことで社員の意識が変わるということも大事なことだと言えます。ひなりの経験のひとつですが、特例子会社ができ障がい者が親会社で働くようになった当初、健常者の社員との間にはまだ意識的な壁があったように思います。それが、社内清掃の業務などを通して関わりが生まれ、感謝の言葉や会話が交わされるようになり、お互いが身近で自然な存在へと変化していききました。こうしたことは、社会全体に広がっていく現象だと思っています。ノーマポートの「ノーマ」は「ノーマライゼーション」を指し、障がいのある方がいること、ともに暮らしていることが普通のことだという意味の言葉です。そして、ポーターは「港」。自分自身もそうですが障がい者にとって、また全ての新しく取り組もうという人にとっての船出という思いでつけた名前です。これから先、企業が福祉や農業といった様々な分野と関わり、その役割を果たすことで、社会にとって大きな力になっていくと思います。これから迎える多様性の時代、様々な立場の人がともに生き生きと暮らせる社会のために、私もできる限り多くの人と関わりを持ちながらお役に立てればと思っています。